

# 子どもの自律的学習の基盤はいかに育まれるか

—子どもの自己制御的行動に関連した母親の育児に対する考え方<sup>1)</sup>

渡辺 忠温<sup>a)</sup> 竹尾 和子<sup>b)</sup> 渡部 朗代<sup>c)</sup>

**Abstract :** In this research, a longitudinal interview survey was conducted on seven pairs of children and their mothers in order to review mothers' thoughts about children's developmental change and child-raising in connection with the developmental change of children's self-regulation behavior. The study includes children's learning of self-regulation because such behavior is the foundation of children's autonomous learning and education. The survey started when children were two years old and ran until they became five years and one month old. Analysis on narratives from the interviews revealed various categories concerning thoughts about child-raising, which were roughly sorted into four perspectives (criteria for discipline, what they teach, approach to teaching, and others). Concerning the teaching approach, following frameworks were found; (1) The importance is attached to direct child-raising methods; (2) The importance is attached to indirect child-raising methods; (3) Active involvement with a child; (4) Either "a child follows a mother" or "a mother follows a child"; and (5) A mother's own state of mind and necessary time regulation for her to secure time she can spare. These frameworks had commonality with frameworks of mothers' responses toward children's self-regulation behaviors.

**Keywords :** self-regulation, toddler, mother-child relation, self-regulated learning

## 問 題

学習場面において、たとえば自己制御学習 (e.g., Zimmerman, 1989) のように、学習者にいかに積極的かつ自律的に学習を行わせるかという点は、今日の教育および学習指導における焦点となっている研究テーマのひとつだと言える。一方で、学習者 (あるいは子ども) には自己制御の特性的で比較的安定的な傾向性のようなものも存在し、これまで自己主張と自己抑制から構成される子どもの自己制御機能 (柏木, 1988) の発達として検討されてきた。前者が主に子どもの自律的な学習行動のメカニズムや親や教師による介入によってそれを変化させる方法などに注目するのに対し、後者については、特に学業場面に限られない、また、たとえば幼児期からの比較的長期にわたるスパンでの子どもの自己制御行動の変化にも注目する点で、両者には違いがある。その一方で、たとえば、乳幼児期における衝動性の少なさや粘り強さといった自己制御的な行動特徴が、学童期における学業成績の高さを予測する (Kashiwagi, Azuma, Miyake, Nagano, Hess, & Holloway, 1984) といった際に、後者が前者のような学習・教育場面での学習者の行動の基盤となっている可能性は高い。

後者のような自己制御機能の発達が特に乳幼児期においてどのように形成されていくかについては、様々な先行研究があるが、その発達に影響を及ぼすもののひとつとして、親の育児方略や養育態度と自己制御機能との関連が検討されてきた。たとえば、中道 (2012) は、親の養育態度を Baumrind (1967; 1971) による権威的 (authoritative : 応答性と統制がいずれも高いタイプ)、権威主義的 (authoritarian : 統

<sup>a)</sup> 理学部第一部 教養学科 <sup>b)</sup> 教育支援機構 教職教育センター <sup>c)</sup> 白百合女子大学大学院 文学研究科

---

制が高く、応答性が低いタイプ)、許容的 (permissive : 応答性が高く、統制が低いタイプ) の3つの養育態度に分類したうえで、父母それぞれについて、子どもの自己制御との関連を検討している。結果は、母親については、自己主張については親の養育態度との関連は見られなかったのに対して、自己抑制では、母親が権威主義的もしくは許容的態度の場合には、自己抑制の得点が低かった。また、森下・前田 (2015) では、児童期における母親の養育態度としつけ方略が、自己制御機能に及ぼす影響について検討し、養育態度としつけ方略の組み合わせのあり方が、子どもの自己主張に影響を及ぼすことを示している。また、戸田 (2006) では、幼稚園児の母親を対象とした質問紙調査の結果から、養育態度の中でも過保護や甘やかしが自己主張に負の影響を与えていることを示している。

これらの先行研究が、子どもの自己制御行動にいかに関係が対応していくべきかについて有用な知見を提供していることは間違いがない。ただし、これらの研究では、養育態度やしつけ方法など、育児についての考え方を調査する際に、既存の尺度を用いており、特に自己制御に関連した育児についての親の考え方 (態度や方法についての考え) について調査しているわけではない。もちろん、子どもの行動全般に対する親の養育態度や考え方 (およびその傾向性) は、子どもの行動の中の一部である自己制御に関する行動への考え方との関連が大きい。しかしながら、両者 (子どもの行動全般に対する考えと自己制御に関する行動への考え) は一致するものではなく、自己制御についての親の考えには、自己制御特有のものが存在しているはずである。また、そもそも自己制御に関する親の考え方自体が、日常における具体的な母子のやりとりと密接に関連している (やりとりの中で形成される、あるいはやりとりに合う形で変容する、など) 以上、子どもの自己制御の発達的变化とそれに対する親の考え方の関連についてより詳細に検討していくためには、子どもの行動全般に対する親の考え方ではなく「自己制御に関する」親の考えを、日常におけるやりとりを含んだ語りの中からボトムアップに抽出していくことも重要である。また、そのためには、母親の語りを丁寧に引き出すと同時に、得られた語りのデータを詳細に分析していく作業が必要となり、必然的に大規模なデータを用いた質問紙調査による検討ではなく、比較的少数の事例に対して細かい検討を加えていくことが必要となる。

そこで、本研究では、子どもの日常における自己制御的行動に関する母親の語りの中から、母親の育児についての考え方を抽出したうえで、考え方の枠組みについての分析を行う。そのうえで、2歳台の子どもの自己制御的行動とそれに対する母親の対応行動 (渡辺・竹尾・渡部・高橋, 2016)、およびそれらの母親による理由づけ (渡辺・竹尾・渡部・高橋, 印刷中) と、それらの背景にある母親の育児についての考え方との関連についても考察を行う。

## 方 法

### 1. 調査協力者

東京都在住の2歳前後の子どもの母親を対象として調査協力を依頼し、協力の承諾を得た7組の母子 (男児4名、女児3名) に調査を実施した。調査・分析対象児はすべて調査実施時点においては末子であり、そのうち3名は第二子、2名は第一子であり、第三子と第四子がそれぞれ1名であった。また、母親は、5名が専業主婦、2名が有職者であった。各調査協力者 (母子ペア) の属性については、表1のとおりである。

### 2. 調査方法

上記7組の母子に対して、調査対象児が2歳0か月前後から (親子ペアAについては2歳6か月から) 子どもが5歳1か月頃にいるまでの期間 (親子ペアFについては3歳4か月まで)、子どもの自己制御 (自己主張・自己抑制) の発達的变化について調べることを目的として、縦断調査を実施した。調査内容は実験前のインタビュー (日常インタビュー)、実験、実験後のインタビュー (実験についての振り返りイン

表1 各母子ペアの属性

母子ペア	調査開始時 年齢	性別	母親の職業	兄弟姉妹の有無	2歳0か月～2歳11か 月までの調査回数	3歳0か月～3歳11か 月までの調査回数	4歳0か月～5歳1か 月までの調査回数
A	2歳 7か月	男	専業主婦	姉2人、兄1人	4	8	5
B	2歳 2か月	女	専業主婦	兄1人、姉1人	8	6	4
C	2歳 0か月	男	専業主婦	姉	9	6	4
D	1歳11か月	男	専業主婦	姉	7	4	4
E	1歳10か月	男	有職者	—	7	5	4
F	1歳10か月	女	専業主婦	姉	8	3	—
G	2歳 3か月	女	有職者	—	6	6	4

タビュー) の3つのフェーズにより構成されていた(調査内容については、竹尾・渡辺・渡部(2015)を参照)。本研究では、それらの調査内容の中でインタビュー調査(日常インタビュー)の分析結果について報告する。調査は開始時から3歳6か月にかけては、およそ1か月半に1度のペースで、その後は3か月に一度のペースで調査を実施し、4歳7か月の調査後は6か月後の5歳1か月に最終の調査を行った。なお、インタビュー時の録音については調査対象者である母親の了承を得て行った。

### 3. 分析方法

#### (1) 「話題」の設定

文字化された母親のインタビュー時の語りの内容を、そこで語られている話題のテーマや具体的エピソードごとに「話題」として分割した。すなわち、各回のインタビューは複数の「話題」(テーマやエピソード)から構成されることになり、以下で述べる分析はこれらの「話題」を分析の単位として進められた。

#### (2) コーディングの手順とカテゴリーの設定

インタビュー調査においては、主に子どもの自己制御(自己主張・自己抑制)的行動についての聞き取りを行ったが(インタビュー時の質問項目については、渡辺・竹尾・渡部・高橋(2016)を参照)、母親の語りの中には、直接自己制御的行動に関するもの以外の内容も多く含まれている。本研究では、具体的な(個別の)自己制御的行動ではなく、それらに関して母親が語る際に同時に語られている「育児や自己制御的行動全体に対する考え方」についての母親の語りについて分析対象とした。

母親の育児や自己制御的行動全般に関連した内容を含む各「話題」において、語りの中に見られる内容を、やや抽象度の低いカテゴリーである「下位カテゴリー」としてボトムアップに抽出し、同時に各「話題」を単位に、「下位カテゴリー」を用いてコーディングを行った。さらに、下位カテゴリー間の内容の関連性にもとづいて、それらの下位カテゴリーを包括的に扱う上位概念として、抽象度を上げた形で上位の「カテゴリー」としてまとめた。また、「育児方法についての考え方」については、上位カテゴリー間の類似性などに留意しつつ、4つの「語りの側面」にまとめた(下位カテゴリーから語りの側面までのカテゴリー間の関係については、結果に含まれる表2から表5も参照)。カテゴリーをより抽象度の高い上位のカテゴリーや側面へとまとめ上げる過程においては、単に下位のカテゴリー名の表面的な類似性からカテゴリーをまとめることにならないように、データ自体を参照し、語りの流れを確認しながら分析を行った。これらの分析(語りについてのコーディング)では、NVivo 10を援用した。

## 結 果

### 1. 育児の基準、内容と方法についての考え方

まず、母親の語りについて、母親が育児においてどのような点を重要・必要だと考えているか(育児方法についての考え方:表2)、という観点から語りを分析したところ、29の上位カテゴリーと、さらに大きく分けて「しつけの基準」、「しつけ内容」、「しつけ方法」、「その他」の4つの語りの側面に分類された。

表2 育児方法についての考え方

語りの側面	上位カテゴリー	直接	間接	関与度	親子優先	母親調整	定義	下位カテゴリーの例	A	B	C	D	E	F	G	計
しつけの基 準	しつけの基準						育児やしつけについての母親の行動の基準に ついて語られている場合。	きょうだい間で公平に扱う必要性(1/0/0)、怪我 をしたりさせたりしなければOK(1/1/0)、怒るポ イントは人によって違う(0/2/0)	0	3	0	1	0	0	0	4
	我慢						我慢についてのしつけが必要だと語られてい る場合。	やりたいことをするのならやるべきことをやっ てから、と教える(0/0/1)、我慢を覚えさせるこ とが重要(2/0/0)、大事な話をしている時は待つ ように伝える(0/1/0)、欲しいものを手に入れる ためには頑張らなければいけない(0/1/0)	1	3	0	0	1	0	0	5
	言葉づかい・コミュ ニケーション						言葉づかいやコミュニケーションについての しつけが必要だと語られている場合。	気を引くにはいい言葉づかいをした方がいい と教えている(0/1/0)、自分の気持ちを言葉で伝 えられるように教えた方がいい(0/1/0)、乱暴な 言葉は使わせない(0/1/0)	1	1	0	0	1	0	0	3
	生活習慣						生活習慣についてのしつけが必要だと語られ ている場合。	食事に関してのしつけは厳しくする(0/3/0)、生 活リズムをつけやすいよう気を配る(0/1/0)	0	4	0	0	0	0	0	4
	しつけ内容															
	礼儀・道徳						礼儀や道徳についてのしつけが必要だと語ら れている場合。	悪さが許されなくなる時期までにしつけてお かなければいけない(0/0/1)、言ったりやったり してはいけないことは厳しく教えない(0/0/1)、 大きな嘘や言い訳を見逃さないようにしなけ ればいけない(0/0/1)、入園までに謝れるように して送り出したい(0/1/0)、表現が豊かになった 分礼節も学ぶべき(1/0/0)	0	2	1	0	1	0	1	5
	テレビに関するしつ け						テレビをめぐるしつけについての考えが語ら れている場合。	テレビは時間を決めて見せる(0/0/4)、テレビを 見せると来ただがだらだとして良くない(0/0/1)、 テレビ番組は録画してひとつずつ見せる (0/1/0)、寝る時はテレビをつけず静かな環境に する(0/1/0)	0	3	0	0	0	1	3	7
	子どもをほめる必要 性・ほめ方		○			○	子どもをほめることの必要性やほめ方に留意 する必要性について語られている場合。	たくさん褒めればやり続けるのかなと思う (0/2/0)、最後までできたら褒める方が子どもは うれしいと思う(0/0/1)、子どもの行動を元にし て褒めるようにする(1/0/0)、子どもを褒めるの はいいことだと思う(0/1/0)	1	0	2	0	0	0	2	5
	子どもを叱る必要 性・しかり方		○			○	子どもを叱ることの必要性あるいは否定的評 価や叱り方に留意する必要性について語られ ている場合。	子どもを怒らない母親を見るとイライラする (0/1/2)、自分の子どもじゃなければそんなに怒 らない(0/1/0)、成長を止めてはいけないので頭 ごなしに叱ってはいけない(1/0/0)	0	3	1	0	1	0	0	5
	言い方・働きかけ方 の重要性		○				子どもへの語りかけの仕方や言い聞かせ方が 重要だと語られている場合。	きちんと子どもに話をしてあげることの重要 性(1/0/0)、わかるようにちゃんと叱って覚えて もらおうと思う(0/1/0)、強引に言い聞かせよう としてもダメ(0/1/1)、兄弟姉妹でも親の注意の 仕方大きく違う(0/0/1)、怒鳴っても聞かない から優しく言うようにする(0/2/0)	1	3	0	1	2	0	1	8
暴力による育児の否 定		○				育児において暴力を使うことに対して否定的 な考えが語られている場合。	子どもを叩いてはいけない(2/0/0)、暴力の チェーンを断ち切らなければいけない(0/1/0)、 暴力は自分の感情をぶつける甘えだ(0/1/0)	0	0	0	0	4	0	0	4	
子どもの周りの環境 を整えることによる 育児の必要性			○			育児において子どもの周りの環境を整えるこ とが必要だと語られている場合。	しつけの部分で3歳からは幼稚園がいい (0/2/0)、幼稚園は制度として必要だと思う (0/1/0)	0	0	0	0	3	0	0	3	
しつけ方法																
子どもの周りの人間 関係を整えること による育児の必要性			○			育児において子どもの周りの人間関係を整え ることが必要だと語られている場合。	子どもと他の子の関係についても親ができる ことはフォローしなければいけない(0/0/2)、本 来入園している歳なので人に慣らさなくては いけない(0/1/0)	0	2	1	0	0	0	0	3	
子どもとしっかり付 き合う必要性				○	○	子どもとじっくり付き合う・コミュニケー ションをとることが必要だと語られている場 合。	子どもとちゃんと付き合うようにしなくては いけない(0/1/0)、時間を大切にしてコミュニ ケーションを多く取りたい(0/2/0)、適当にあし らわれていると思わせてはいけない(0/1/0)	0	0	0	0	1	0	3	4	
母子で一緒に何かを することの重要性					○	母親が子どもと一緒に何らかの作業や行動を することの重要性について語られている場 合。	一緒に作業しておけば将来自然にできるよう になる(0/1/0)、母親と一緒に関わると子どもは 安心、愛情を感じる(0/1/0)	1	0	0	0	0	1	0	2	
子どもに自分でやら せる必要性				○		子どもに自分で何らかの行動を行わせること が必要だと語られている場合。	自分でやったものは最後までやらせたい (0/0/1)、自分でやりたいと言ったことはやらせ てあげた方がいい(0/4/0)、自分でやれば相手の 気持ちが分かることにもつながる(0/1/0)、自分 で出来れば自信につながってやる気が出る (0/1/0)	5	1	0	0	0	0	0	6	
子どもを放任・放っ ておくことの必要性					○	子どもを放任しておくことや好きにさせてお くことが必要だと語られている場合。	その場を収めようとするとうまく行かない (0/1/0)、ひとりでおとなしく遊んでいるならそ れでいい(1/0/0)、兄弟姉妹間のことには口を挟 まない(0/0/1)、子どもが集中できるように手や 口を出さない(0/0/1)、放任のほうがのびのび育 つ(1/0/0)	1	1	0	1	1	0	1	5	

語りの側面	上位カテゴリー	直接	間接	関与度	親-子優先	母親調整	定義	下位カテゴリーの例	A	B	C	D	E	F	G	計
	対応基準を一貫させる必要性				○		育児の際に何らかの対応の基準を持つておくことが必要だと語られている場合。	子どもに対して絶対譲らないポイントを決めている(0/6/1)、対応方法に一貫性をもたせるべき(2/1/1)、怒る基準に一貫性をもたせるべき(1/0/0)、父親と母親の対応に一貫性が必要(0/0/1)	0	7	1	0	2	2	1	13
	子どもの動機づけ・方向付けの重要性				○		子どもの行動を親の働きかけで方向づけることが重要だと語られている場合。	好きなことを少しずつやっていけばうまくいくはず(0/0/1)、子どもが関心を持たないことを教えようとしてもうまくいかない(0/1/2)、子どもには情報や刺激を適度に与えておいた方がいい(0/1/0)、子どものエネルギーを考えてもう少し思い切り遊ばせたい(0/1/0)、子どもの気分をコントロールして乗せてやらせる(0/0/1)、出来ないことに執着させず切り替えた方がいい(0/1/0)	0	0	5	0	1	1	1	8
	子どもの意思を優先・尊重した対応の必要性				○		子どもの意思や考えを尊重し、推測しながら育児することが必要だと語られている場合。	あまり押し付けないようにする(1/0/0)子どもの個人を尊重する(0/1/0)、子どもの行動に口出しし過ぎるのはよくないと気付いた(0/0/1)、子どもの頭の中のストーリーに配慮しなければいけない(0/1/0)、手や口を出し過ぎると子どもの意欲がなくなる(0/0/1)、親子関係は親からの一方的になりがちだから注意が必要(0/1/0)、待つてあげることも大事(2/0/0)	4	1	0	0	2	0	1	8
	子どもをよく見る・観察した上での対応の必要性				○		子どもをよく観察し、気持ちを推測したうえで対応する必要性について語られている場合。	子どもがなにかやるときには必ず理由がある(0/2/0)、子どもが叩かれて泣いていてもその理由の確認が必要だ(0/0/1)、子どもが必要としていることを見極める(0/1/0)、子どものいざこざは様子を見てから対応する(0/0/1)、子どもの目線になって考える(0/2/0)、子どもを観察することが重要(1/0/0)、子どもとの内と外での違いをちゃんと見る(0/0/1)、疲れているときは何を言ってもダメ(1/0/0)	0	5	0	0	3	1	0	9
しつけ方法	柔軟な育児の必要性				○		柔軟な考えで育児していくことが必要だと語られている場合。	育児に対する思い込みがあるのはよくない(0/0/1)	0	0	0	0	1	0	0	1
	年齢の増加・成長に合わせて育児方法を変化させる必要性				○		子どもの変化に合わせて育児の方法を変える必要性について語られている場合。	4歳からは大人として扱う(0/0/1)、新しい関係を築かなければいけない(0/1/0)、成長したら別の方法を考えなくてはならない(0/2/0)	0	0	0	0	4	0	0	4
	心理的・時間的余裕をもって子どもと接する必要性				○		母親の側が余裕をもって育児する必要があることについて語られている場合。	のんびりいこうと思う(0/1/0)、育児には体力・時間・精神的な余裕が必要(0/1/0)、子どもが焦る状況を作らないようにしている(0/2/0)、子どもは時間がかかるもの(0/2/0)、時間に追われずに済む間は追われないでおこうと思う(0/1/0)、時間に追われていなければ怒る理由はない(0/1/0)、時間制限があっても少しの遅れはまあいいかと思う(0/0/1)、余裕をもって接することの重要性(1/0/0)	0	4	3	1	1	0	0	9
	父母間での育児の役割分担の必要性				○		父母の間で育児の役割分担が必要だと語られている場合。	子育てにおける役割分担の必要性(1/0/0)、夫婦で育児分担ができていての助かる(0/1/0)、父親が優しい分母親が厳しくしてメリハリをつける(0/0/1)	1	0	0	0	0	0	2	3
	仕事と育児を両立させる必要性				○		仕事と育児を両立させることが育児にとって必要だと語られている場合。	育児も仕事もしっかりやりたい(0/1/0)、仕事で子どもに悪影響を与えないように心がけている(0/1/0)、仕事より子どもの方が大事な時期がある(0/1/0)	0	0	0	0	1	0	2	3
	子どもを肯定的にとらえる必要性						子どもに対して受容的で肯定的な見方をする必要性について語られている場合。	子どものいいところを見てあげたい(0/0/1)	0	0	0	1	0	0	0	1
	甘えさせる必要性						子どもに時には甘えさせることも必要であると語られている場合。	家はほっとするところだから甘えがあってもいい(0/0/1)	1	0	0	0	0	0	0	1
	他の子と発達の高さを比べない						—	(0/1/0)	1	0	0	0	0	0	0	1
その他	その他						—	なんでも余裕を持ってできるように育てた(0/1/0)、家庭で言えることは注意して、直したい(0/0/1)、泣けばいいと思われては困る(0/1/1)、子どもの前ではよその家のことを悪く言わない(0/0/1)、出来ないということも受け入れさせないといけない(0/1/0)、親になる前までの育児についての考え方(1/0/0)、母親がしつけをしないと家の外では通じない(0/2/0)、本当に困るような状況を体験させないとダメ(0/1/0)	0	6	2	0	1	0	1	10

(注1) 表中行頭のアルファベットは、各母子ペアを表す。また「直接」「間接」「関与度」「親-子優先」「母親調整」の列は、図1における括弧内の略称に対応する。

(注2) 下位カテゴリーの列内かっこの中の数字は左から順に2歳台、3歳台、4歳以降の母親の語りにも出現した話題数。

このうち、「しつけの基準」(4:以下括弧の中では話題数の合計を示す)は、主に、子どもに対してしつけやなんらかの教育的な介入を行う(あるいは行わない)際の判断基準として、どのような事がらを重視するかについて語られているものである。また、「しつけ内容」については、子どものどのような面でのしつけについて重視するか、という点についてのカテゴリーであり、上位カテゴリーとしては5つのカ

テゴリーに分類された。

しつけの方法についてどのような点を重視しているかについての語りである「しつけ方法」については、22 の上位カテゴリーが見られ、中でも特に多かったのが、「対応基準を一貫させる必要性」についてのカテゴリーであった (13)。また、「心理的・時間的余裕をもって子どもと接する必要性 (9)」や「子どもをよく見る・観察した上での対応の必要性 (9)」、「言い方・働きかけ方の重要性 (8)」、「子どもの意思を優先・尊重した対応の必要性 (8)」、「子どもの動機づけ・方向付けの重要性 (8)」なども多くみられる。これらの「しつけ方法」に関する上位カテゴリーを見れば、母親の考えに、いくつかの (母親間での) 共通の枠組みが存在するように思われる。

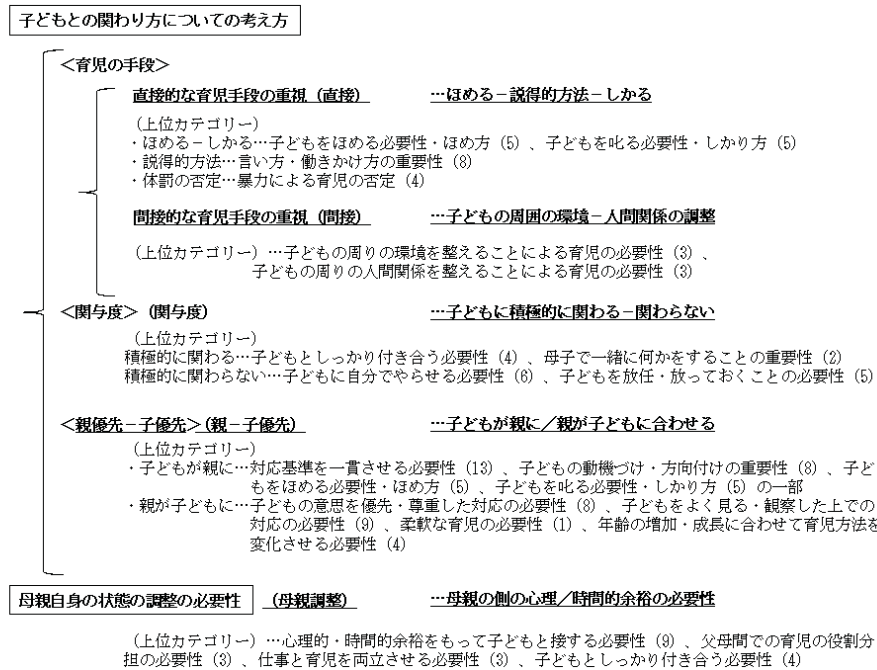


図 1 自己制御に関連した育児の方法に関する考え方の枠組み

(注) 図中の括弧内の語は略称を表す (表 2 参照)。

表 2 にもとづいて、上位カテゴリーの背後にあると考えられるしつけの方法についての共通の枠組みをまとめたものが図 1 であり、こうした子どもの自己制御的行動に関連した母親の育児についての考え方の枠組みについては、これまでの先行研究では比較的体系立てては検討されてこなかったものと言える。ひとつは、「子どもとの関わり方についての考え方」という、子どもに対する働きかけ方のバリエーションが存在している。その中で、「育児の手段」についての枠組みには、「直接的な育児手段の重視」と「間接的な育児手段の重視」があり、「直接的な育児手段の重視」の中で、最も大きな観念の違いは、「ほめる」べきなのか「しかる」べきなのかという点にある。また、中間的なものとして、ひとつは、しかるといったやや強引なものではなくより「説得的方法」、それとは別に、しかる場合にもより「説得的方法」に近い「体罰の否定」がある。また、子どもの周りの環境を整えることで間接的に子どもの発達をサポートしようとする「間接的な育児手段の重視」には、「子どもの周りの環境を整えることによる育児の必要性」と「子どもの周りの人間関係を整えることによる育児の必要性」がある。

「育児の手段」以外には、まず「関与度」についての枠組みという、親が「子どもに積極的に関わる」か、それとも「関わらない」か、についての枠組みがある。さらに、「親優先-子優先」という、親の考えを固定したうえで子どもに関わる場合や親の考えに子どもを従わせようとする方向での育児 (つまり親の意図が子どもの意図よりも優先される: 親優先) と、子どもに親が合わせる形での育児 (子どもの意図が親

の意図よりも優先される：子優先) という、両極からなる枠組みも存在する。

また、これらの「子どもとの関わり方についての考え方」の枠組み以外に、「母親自身の状態の調整の必要性」という、子どもと関わっていくうえで、親自身の状態を調整する必要について言及する場合も見られ、特に、しっかり育児を行うためには、母親の側に時間的にも心理的にも、余裕が必要とする語りは多く見られる。

## 2. 子どもの自己主張についての母親の考え

子どもの自己主張については、具体的な個別の子どもの自己主張的行動やそれに対する対応、および対応の際に母親が考えていること（渡辺ら，2016；印刷中）の他にも、子どもの自己主張についての全体的な母親の考えについて語られる場面が調査の中で見られている（表3）。

表3からわかるように、子どもの自己主張についての母親の語りは、大きく分けて2つのタイプがあり、ひとつは「通過点・一時的なものとしての自己主張」という、現在の自己主張は発達過程の中での一時的なものにすぎないものとしてとらえるものと、自己主張について肯定的にとらえるものがある。肯定的にとらえる考え方はさらに2つのカテゴリーに分類することが可能であり、「自己主張を肯定的にとらえる」という、単純に肯定するものと、「自己主張をコミュニケーションとして肯定する」という、自己主張をコミュニケーションの一側面としてとらえたうえで肯定している場合がある。

表3 子どもの自己主張についての母親の考え

上位カテゴリー	定義	下位カテゴリーの例	A	B	C	D	E	F	G	計
通過点・一時的なものとしての自己主張	自己主張が発達の過程の中で必要な一時的なものとして語られている場合。	ほうっておけばいつかはおさまるもの(1/0/0), 子どもの自己主張には波があるもの(1/0/0), 自己主張には波がある(2/0/0), 自己主張は通過点(1/0/0), 成長の一時期(3/0/0), 成長過程において必要なこと(1/1/0)	1	7	0	1	1	1	0	11
自己主張を肯定的にとらえる	自己主張を肯定的なものとして捉える見方が語られている場合。	ある程度自己主張できたほうがいい(1/0/0), 言ってくれた方が親も助かる(1/0/0), 自己主張しなければいけないで困る(1/1/0)	0	1	1	1	0	0	0	3
自己主張をコミュニケーションとして肯定する	自己主張を肯定的に捉える見方の中でも特にコミュニケーションとしての自己主張の側面に注目して語られている場合	いやいやもコミュニケーションのうち(1/0/0), 感情を表に出してほしい(0/1/0)	1	0	0	0	1	0	0	2
その他	—	いやいやには時期ごとに特徴的な違いがあるという考え方(3/3/0), 自己主張とわがままは違う(1/0/0), 母親の子ども時代との比較(0/0/3)	0	1	0	0	5	0	1	7

(注) 表中行頭のアルファベットは、各母子ペアを表す。下位カテゴリーの列内かつこの中の数字は左から順に2歳台、3歳台、4歳以降の母親の語りに出現した話題数。

## 3. 子どもの発達過程についての考え

子どもの発達の過程や段階についての言及については（表4）、ひとつは、「発達の時期についての考え方」という、各年齢や発達時期において、子どもの行動の特徴がどのようなものであるかについて母親が語る場合がある。「下位カテゴリー」の内容を見ると、大まかなところでは、2歳台においては、自己主張的な（ある意味、母親にとっては困った）行動に対して、そういった発達の時期なのだから、仕方がない、といった内容のものが多く。それに対して、3歳、4歳以降のことについて語られる場合には、2歳台に比べて、次第に、自己主張的行動が優勢な2歳台から、コントロールがきいた自己制御的な行動に移行していくことが語られる場合が多い。

一方で「発達過程における変化の仕方についての考え方」のカテゴリーにある語りは、特定の年齢や時期について語られるのではなく、子どもの発達や成長がどのようにして起こるかについての一般的な考えについて語っているものである。

表4 子どもの発達過程についての考え

上位カテゴリー	定義	下位カテゴリーの例	A	B	C	D	E	F	G	計
発達の時期について の考え方	各年齢段階における、子どもの発達や変化の特徴について語られている場合。	2歳で手が出るのは時期的に仕方がない(1/0/0), 3歳になるといやいやが終焉に向かう(1/0/0), 4歳になれば我慢やルールがわかるのではない(0/1/0), 4歳は子どもでもお兄ちゃんでもない微妙な時期(0/0/1), 徐々に買ってほしいものが出てくる時期(1/0/0), 聞き分ける力が2歳と3歳の分かれ目(0/1/0), 力加減がわからず本気になって喧嘩が多い時期(0/0/1)	1	0	0	3	1	2	0	7
発達過程における変化の仕方についての 考え方	子どもの発達がどのように起こるかに関する母親の考えが語られている場合。	できないことがいつの間にか、急にできるようになる(0/0/2), 家の外での経験を通じて成長していく(0/0/1), 時間がたてば子どもは放っておいてもよくなるもの(1/0/0), 出来るようになる年齢が早くなっている(0/0/2), 親の予測ラインをクリアすることで成長していく(0/1/0), 幼稚園に入ると落ち着いてくる(0/1/0)	2	1	3	1	0	0	0	7

(注) 表中行頭のアルファベットは、各母子ペアを表す。下位カテゴリーの列内かっこの中の数字は左から順に2歳台、3歳台、4歳以降の母親の語りに出現した話題数。

#### 4. 子どもに対する発達期待と育児についての反省点

また、母親は語りの中で、育児の方法だけではなく、子どもが将来どのように育ってほしいか（子どもに対する発達期待：表5）について語る場合がある。

発達期待についての語りの中で比較的多いのが、「子どもの自主性・自律性について」の期待についてのものである。また、「子どもの性格について」の発達期待を語るものや、「他の子の発達に合わせる」という、他の子どもの発達に遅れないように発達してほしいというかたちでの期待について語る場合も見られた。

表5 子どもに対する発達期待

上位カテゴリー	定義	下位カテゴリーの例	A	B	C	D	E	F	G	計
子どもの自主性・自律性について	子どもが自分で積極的に行動していくようになることを期待している場合	自分のことは自分でできるようにさせたい(0/5/1), 3歳以降は自立していくように決めていた(0/1/0), 自分からあいさつができるようになってほしい(1/0/0), 自分で考えて答を出す力をつけてほしい(0/1/0), 自分で片づけるようになってほしい(1/0/0)	7	1	0	1	1	0	0	10
子どもの性格について	子どもの性格についての期待が語られている場合	素直に育ってほしい・嘘をつかないでほしい(2/0/0), 他人を思いやれるようになってほしい(1/0/0)	0	1	0	0	0	2	0	3
他の子の発達に合わせる	—	同い年の子ができることは最低限できるようにしたい(0/1/0)	1	0	0	0	0	0	0	1

(注) 表中行頭のアルファベットは、各母子ペアを表す。

最後に、母親の語りの中に見られる「育児についての反省点」について言えば（表6）、語りの中で、主に子どもの行動に関して、しかることやほめないことへの反省が語られている。



表6 育児についての反省点

下位カテゴリー	2歳	3歳	4歳～	A	B	C	D	E	F	G	計
毎日怒ってばかりの自分を反省する	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	2
自己抑制できているのにいい面として気づかない	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
怒鳴ればどうにかなると思っていた	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1

(注) 表中行頭のアルファベットは、各母子ペアを表す。

## 考 察

子どもが2歳から5歳1か月になるまでの母親の育児に関する語りの内容を分析した今回の結果をまとめれば、しつけの内容、しつけの方法、自己主張についての考え方、子どもの発達過程についての考え方をめぐって、結果の中では「上位カテゴリー」あるいは「語りの側面」としてまとめられたような、共通の枠組みのようなものが見られた。

こうした共通の枠組みの中で、特に「自己主張についての考え方」や「発達過程についての考え方」において、母親たちが多くの場合子どもの自己主張的行動を発達の過程の中に位置づける（つまり、一時的なものなのだから今は仕方がないと考える、あるいは、発達していく中でそういう時期も必要であると考え）ことで、肯定的にとらえていることが見出された。しかしながら、注意すべきは、このことは子どもの自己主張的行動に対して、母親が対応する際に常に特にストレスも感じず、受容的な対応行動や態度、考えをとるということを意味しているわけではない。母親の語りの中では、実際の対応において、「めんどくさい」、「憂うつ」、「いらいらする」などの否定的な感情を生じさせていることがたびたび示されている（渡辺ら、印刷中）。つまり、自己主張的な行動に対して、信念としては子どもの発達を考慮して「肯定的にとらえるべき」、「許容すべき」と考えながらも、目の前の子どもの行動は受け入れがたい（こともある）というジレンマを抱えながら育児を行っている可能性は高いと考えられる。こうした「肯定・受容すべき」という（ある意味理想としての）信念と現実において生じてしまう否定的な感情との間での母親の心情の揺れ動きが存在している可能性については、今後検討していくべき点として、興味深いものと言える。

また、「しつけの方法」については、今回の分析結果から得られた枠組みには、「上位カテゴリー」の間の関連性から背後にその存在が推察できるような潜在的な共通枠組みのようなものの存在も確認できる。さらに言えば、これらの「母親の育児についての考え方」における共通枠組みは、以下に述べるように、子どもが2歳0か月から2歳11か月の時の、自己主張に対する「母親の対応行動」やそれらの「母親による理由づけ」の枠組みとも関連する点が存在している。

まず、母親の対応行動には、親の側の意図を優先する場合と、子どもの側の意図を優先する場合を両極として、その中間に「交渉」を含んだ母子間でのコミュニケーションをより重視した対応方法のバリエーションがあり、それらとは別にそもそも「対応しない」という対応方法が見られている（渡辺ら、2016）。それに対して、今回の母親の育児方法に関する考え方についての結果の中では、育児の手段以外の考え方の部分について、親が子どもに対して積極的に関わろうとするか、あるいは関わらないようにするかという「関与度」についての考え方の枠組みと、関わろうとする場合については「親優先-子優先」の枠組みが見られ、大まかな対応行動の布置とほぼ一致しているといえる。さらに、今回の結果のうち、育児手段についての枠組みの中では、「直接的な育児手段の重視」の中でほめるかしかるか、という両極の間に「説得的方法」という中間的な方法の重視のカテゴリーもあり、これも渡辺ら（2016）における、中間的な「交渉」を含んだ母子間でのコミュニケーションをより重視した対応方法と対応していると考えることができよう。

---

また、子どもの自己主張的行動に対する母親の対応行動の理由（なぜそのような対応行動をとるのかという理由）についての語りには、理由の説明が主に母親側の事情に重点が置かれているのか（親側の事情）、それとも子ども側の事情に重点が置かれた説明になっているのか（子ども側の事情）、という大きな対比の「軸」があり、2歳台においてはどちらかといえば親側の事情に重点をおいた理由の説明がなされていることが明らかになっている（渡辺ら，印刷中）。これについても、上記のような「親優先－子優先」の枠組みと一致していると言える。

子どもの行動に対する個別の（つまり具体的に語られる）母親の対応行動が、本研究で得られた母親の育児に対する考え方にどの程度影響を受けたものなのか、については、個別の具体的な文脈についての語りの中で、母親が対応行動に対して育児に対する考え方との関連を語る場合ばかりではないため、本研究で分析対象としたデータだけでは個別の母親の対応行動と個別の育児に対する考え方の関連を明確に論じることができない。しかしながら、上述のように、より抽象度の高いカテゴリーや枠組みのレベルでの比較を行った場合、（渡辺ら（2016；印刷中）に見られる）子どもが2歳台の年齢段階における母親の対応行動の枠組みと2歳から5歳1か月までの育児に対する考え方の枠組みの間に一致した点が多く見られたということは、母親が具体的な対応行動をとる際に、その基礎となっている考え方のバリエーション自体は、本研究で得られた枠組みの範囲内のものである可能性が高いことを表している。

また、本研究の結果と先行研究の結果を対比してみれば、育児についての考え方においては、子どもとの直接的関係についての態度や考え方だけではなく、「間接的な育児手段の重視」、「母親自身の状態の調整の必要性」などの枠組みが見られ、また、自己主張についての考え方における「通過点・一時的なものとしての自己主張」といったより発達の過程全般を考慮したものが見られるなど、先行研究には見られなかったカテゴリーも多く存在している。すなわち、自己主張に母親が対応する場合には、先行研究が想定している以上に、母親の考え方のバリエーションが存在していると言え、このことは母親の語りの中からボトムアップに育児に対する考え方を抽出していった本研究のひとつの成果と言える。

一方で、母親の間には、育児についての考え方をめぐって個人差（母親の間での違い）も存在しているのであり（表2～6における母親ごとの話題数を参照）、母親の間の考え方の相違が、実際の対応行動にどのように結びつき、またそうした考え方がどのような背景のもとで成り立っているのかについては、本研究で用いられた母親の語りデータについて、さらに分析を加えていくうえで、詳細に検討していくべきテーマのひとつと考えられる。

## 謝 辞

本研究の長きにわたる調査に快くご協力くださいましたお子様とお母様、そしてご家族の皆様にご心より感謝いたします。

## 注

1) 本研究はJSPS 科学研究費補助金（課題番号：21730527 研究代表者：竹尾和子）の助成を受けて行われたものである。

## 引用文献

- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic psychology monographs*, **75** (1), 43-88.
- Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental psychology*, **4**, 1-103.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- Kashiwagi, K., Azuma, H., Miyake, K., Nagano, S., Hess, R. D., & Holloway, S. D. (1984). Japan-US comparative study on early maternal influences upon cognitive development. *Japanese Psychological Research*, **26** (2), 82-92.

- 森下正康・前田百合香 (2015). 児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **11**, 99-108.
- 中道圭人 (2012). 父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響 静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会・自然科学篇, **63**, 109-121.
- 竹尾和子・渡辺忠温・渡部朗代 (2015). 母子の共同発達過程の一側面としての幼児の自己制御機能の発達: 理論的枠組と方法、そこから見えてくるもの 東京理科大学紀要 (教養編), **47**, 267-283.
- 戸田須恵子 (2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について 釧路論集: 北海道教育大学釧路分校研究報告, **38**, 59-69.
- 渡辺忠温・竹尾和子・渡部朗代・高橋登 (2016). 母親の語りに見られる2歳児の自己制御的行動と母親の対応行動 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, **65** (1), 75-87.
- 渡辺忠温・竹尾和子・渡部朗代・高橋登 (2017). 母親は2歳児の自己制御行動をどのように説明するか—母親の語りから見る子どもの自己制御行動と母親の対応行動の理由— 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, **65** (2), 197-211.
- Zimmerman, B. J., Heart, N., Mellins, R. B., & Zimmerman, B. J. (1989). A Social Cognitive View of Self-Regulated Academic Learning. *Journal of Educational Psychology*, **81** (3), 329-339.